

モーリス・メーテルランク

『タンタジールの死』

訳：横田宇雄

二〇一九年五月六日脱稿

登場人物

タンタジール

イグレーヌ

ベランジェール——タンタジールの姉

アグロヴァル

女王の使い1

女王の使い2

女王の使い3

訳注

- ・底本には『作品集 I I ——戯曲第一卷 Oeuvres II. Théâtre. Tome 1.』
(Bruxelles: Editions complex, 1999. P.: 521-557) を用いた。
- ・人称名詞や非人称主語、代名詞など、前後の文脈から類推でき、日本語として省略できる場合には () を使って読者にのみ分かるようにした。
- ・、日本語として前後の文脈が把握しづらい代名詞や非人称主語、文脈上補わなければならない内容は [] を使って、原文にはない言葉を訳者が補った。
- ・台詞中のト書き (原文ではイタリック) は () に入れて、太字で示した。
- ・原文から大きく離れて意識せざるを得ない場合には注釈をつけた。
- ・構文については訳者による「『タンタジールの死』訳出にあたって」を参照されたい。

第一場

丘の頂上、塔を囲む。

イグレーヌが登場する。タンタジールの手を掴んでいる。

イグレーヌ

一日目、不吉な夜になった、タンタジール。海は呻く、ずっと、私たちの周りで。木々は嘆く。遅く更けた。月は落ちる、城を覆うポプラ林の影に。私たち、ほら、だけなのだ、恐らくは。ここでは、用心して生きていかなくてはならない。僅かな幸せすら、脅かされている。

独り言を、ある日、心の中で言った——神すらも聞き取れない声で——「いつか幸せになろう」と。それ以上は要らなかった。その後、祖父が死に、兄二人は消えた、（二人が）どこにいるのか誰も知らない。

私たち、ほら、だけ、惨めな妹とあなた、可愛いタンタジール。明日の糧もない。ここにきて、座って、膝に。ぎゅっと。（あなたの胸を）首に（近づけて）……。離さない、覚えている、あの時、私だった。あなたを連れて行った夜、その時が来た日。（あなたは）怯えていた、ランプの影。長い廊下、窓もなかった！（私の）唇は震え、心から驚いた。あなたと再開した今朝、突然。（あなたは）遠くで、穏やかに暮らしていると思っていた。

ここへ連れてきたのは誰？

タンタジール

分からない（、姉さん）。

イグレーヌ

分からない。何と（言われた）？

タンタジール
出て行け。

イグレーヌ
出て行け？

タンタジール
女王が望んだ。

イグレーヌ
女王が望んだ。なぜ？ 何か話していたはず……。

タンタジール
（姉さん、）何も（聞いてない）。

イグレーヌ
あの人たちは何を（話していた）？

タンタジール
（姉さん、）声は小さかった。

イグレーヌ
いつも？

タンタジール
いつも。私を見る時以外（、イグレーヌ姉さん）。

イグレーヌ

女王のことは話していない！

タンタジール

（イグレーヌ姉さん、あの人たちは）女王を見たことはない、と。

イグレーヌ

甲板に（一緒に）いた人は、何も？

タンタジール

風と帆にかかりきりだった（、イグレーヌ姉さん）。

イグレーヌ

ああ！ そうだろう（、タンタジール）。

タンタジール

（私は）放っておかれていた（、姉さん）。

イグレーヌ

聞いてタンタジール、あなたに伝える、知っていること。

タンタジール

知っていること（、イグレーヌ姉さん）？

イグレーヌ

ほんの少し……。妹と私はずっと耐えてきた¹！ 生まれた時から、ここで起きる、全てのことを受け入れていた……。この島で、盲のように暮らしていた、長い間。

全てが当たり前だった——他に何も見なかった、鳥が飛び、葉が落ち、バラが咲く——こんな静けさが広がる、園で熟した実が落ちると、人が窓から顔を出す……。不安を抱える人のいない場所——ただ、ある夜、分かった、何かあるに違いない——逃げたいと思った、逃げられなかった。

分かる、私の言うことが？

タンタジール

ええ、ええ、姉さん、分かる、ここで暮らす全て²。

イグレーヌ

そう。もう話すことはない、知っていること以上には……。見て、枯れ木——視界を汚している——の、後ろにある塔が見える？ 谷の奥。

タンタジール

黒い（、イグレーヌ姉さん）？

イグレーヌ

そう、黒い……。暗い峡谷よりも、もっと深い。そこで暮らさなければならない。[塔は] 他へ建てるべきだった、大きな山の頂、塔を囲む。山は、日中、日が当たる……。深呼吸できる場所で。海と平野——岩の向こう——が見えるところで……。

でも、あの人たちは谷の奥底を好んでいる……。空気さえも、あんな底にはおりにかない……。荒果て、誰も気に留めない……。あの塔だけは、時を刻まない。大きな塔。あの宮殿は闇から出てこない。

タンタジール

灯りがついた（、イグレーヌ姉さん）。見て、見て、赤い大きな窓。

イグレーヌ

あれは塔の灯り。只一つ、明かりが見える場所。そこに女王の椅子がある。

タンタジール

女王は見えない？

イグレーヌ

誰も見えない。

タンタジール

どうして見えない？

イグレーヌ

こっちへ、タンタジール……。聞かれないように、鳥や草に。

タンタジール

草なんてない、姉さん。（沈黙。）女王は、何を？

イグレーヌ

誰も知らない。女王は姿を見せない——あそこに住んでいる、たった一人、あの塔に。日中、使いは出てこない。女王はとても年を取っている、私たちのお母さんのお母さんだ、女王は一人で治めたい——女王は疑い深く、嫉妬深い。狂って

いると言われている——彼女の地位に、誰かが立つのを恐れている。恐らく、その不安から、お前を連れてくることを望んだ……。

命令は訳がなくても執行される……。

女王は、決して降りてこない、扉は閉まったまま、夜も昼も……。女王を、私は見たことはないが、他の人は見たことが、かつて、姿を見せた——若かった時——ある……。

タンタジール

女王は醜い（、イグレーヌ）？

イグレーヌ

美しくはなく、太っているそうだが、見たものは何も言いたがらない……見たとして、誰が分かるのだろうか？ 女王には、人智の及ばぬ力がある。私たちは、心に容赦なく大きな重荷を負わされながら、生きていく。そんなに恐れなくて、悪い夢は捨てて。あなたを見守っている、タンタジール。悪いものはやってこない、離れないで、私とベランジェール、年老いたアグロヴァル先生から。

タンタジール

アグロヴァルからも（、イグレーヌ）？

イグレーヌ

アグロヴァルからも……。彼には愛がある……。

タンタジール

彼はもう年だよ、姉さん！

イグレーヌ

彼は年を取っている。だが、賢い……。そばにいる唯一の友人、物を知っている。
——奇妙にも、女王はお前をここに連れてこさせた、誰にも言わずに。
心がざわついて、整理がつかない……。⁴ 悲しかった、そして嬉しかった。あなたが
遠くにいると知って、海の向こうに……。今は驚いている——今朝、太陽が山か
ら覗くか見に出たら、かなたにあなたを見た……。すぐに分かった……。

タンタジール

違う、姉さん、私が先に微笑んだからでしょう……。

イグレーヌ

その時は、笑えなかつただけ……。きっとあなたも分かる……。
時間だ、タンタジール、海の風が黒くなってきた……。抱きしめて、もっと強く、
もっと、もっと。あなたは愛されている。手を出して……。握っている、病んだ塔
に戻ろう。

二人、出ていく。

第二幕

塔の一室

アグロヴァルとイグレーヌがいる。ベランジェールが入って来る。

ベランジェール

タンタジールは？

イグレーヌ

ここで、大きな声では話さないで。他の部屋で寝ている。顔色が悪い、苦しそう。旅と移動で疲れているのだろう。塔の雰囲気、あの小さな心⁵を押しつぶしたのか。

訳もなく泣いていた。膝の上へ抱いてやった、ここへ、見て——ベッドで寝ている——とても深く寝ている、手を上にして、可哀想な小さい王子とでも……。

ベランジェール、突然に涙を流して

姉さん！ 姉さん！ かわいそう……！

イグレーヌ

どうしたの？

ベランジェール

これは口に出せない……きちんと分かっているわけではないのだけれど……耳にしがたいことを耳にした。

イグレーヌ

耳にした？

ベランジェール

塔の廊下を通りかかった。

イグレーヌ

ああ……？

ベランジェール

半開きの扉があった。すごくゆっくり押して……中に入った……。

イグレーヌ

どこ？

ベランジェール

分からなかった。もう一つ廊下があった、明りに照らされた。そこに、天井の低い通路があった、出口はなかった……。立ち入られることを拒否しているようだった。恐ろしくなって、途中で戻ろうとした。その時、不意に人の声が、かすかに聞こえた……。

イグレーヌ

女王の召使に違いない。あの人たちは塔の地下に住んでいる。

ベランジェール

それが何だったか、良く分からない。ここは、扉以外にも何かあるに違いない。誰かの苦しそうな声が聞こえてきた。近づいてみた、できる限り……。何もなかったかもしれない。ただ、今日来た子どもと、金の冠のことを話している気がした……。あの人たちは笑っていた気がする。

イグレーヌ

笑っていた？

ベランジェール

笑っていたと思う。いや、泣いていたのかもしれない、私には理解できないことだった、よく聞こえなかったから。彼らは静かに話す。まるで洞穴の中で群れているよう……。子どものことを話していた、女王が会いたがっているという。あの人は来るだろう、恐らく今夜。

イグレーヌ

何？ 今夜？

ベランジェール

そう、そう……。そうだろう……。

イグレーヌ

誰のことを話していた？

ベランジェール

子どもだと言っていた、小さな子ども……。

イグレーヌ

他に子どもなんていない……。

ベランジェール

その時は、少し大きな声で話していた。一人が言った、まだその時ではない、と……。

イグレーヌ

わかる、その意味が。彼らが塔を出るのは初めてではない……。女王が彼らを送る理由は明らか……。ただ、（だからといって）女王が急いでいるとも限らない！ ……待ちましょう……私たちは三人、時間もある。

ベランジェール

何をする？

イグレーヌ

まだわからない、何するか。でも女王を出し抜く⁶つもり……分かる、これが？
（あなたたちは）震えている？ つまり……。

ベランジェール

何？

イグレーヌ

女王に（タンタジールは）奪わせない、簡単には。

ベランジェール

私たちしかいない、イグレーヌ姉さん……。

イグレーヌ

ああ！ そう、私たちしかいない！ ……打開策は一つ。これで、いつもうまく
いていた！ ……膝をついて待っているんだ、あの時のように……。冷ややかな
声。女王はきっと許してくれる！ ……涙を見て手を緩めてくれる……女王
の望みに合わせなければ。女王は笑うだろう。服従するものは、いつも許してく

れる。この巨大な塔に何年も住み、貪り続けるは、私たち——彼女の顔をたたこうとするものさえいなかった……。女王は私たちの心を押さえつけている。墓石のように。女王に心を許すものは誰一人いない……。ここに男がいた頃は、みんな女王を畏れていた、そしてみんな（はいつくばって）倒れていった……。今は、女の番。さあ、（ついに）女が立ち上がる時。女王の力が何によるかわからない。塔の闇の中で生きていきたいくはない……。逃げなさい、二人は。私はまだ一人で待っている。もし恐いのなら……。私は女王を待っている。

ベランジェール

（妹、） どうしていいかわからない。でも、あなたと一緒にいる……。

アグロヴァル

私もここにいる……。この魂は、ずっと不安なまま。やってみましょう。何度か、やってきたことなのだから……。

イグレーヌ

やってきた……あなたも？

アグロヴァル

この人はみんな……。でも、最後、みんな力を失ってしまった……。あなたも、わかるでしょう……。今夜にでも、女王の元に行くように命じられるでしょう。何も言わず両手を合わせよう。疲れた足で、階段を上るんだ。遅くもなく、早くもなく。目を開けて、階段を降りることはないと言いながら……。女王に立ち向かう勇気がない……。この両手は、全て無駄、誰にも当たらない……。この手ではない、必要なのは、全て無駄……。

でも、あなたの望む糧になりたい……。扉を閉めて（、私の子）……。タンタジールを起こしてあげて、胸に抱き、膝にのせて……。他に守れるものはない。

第三幕

同じ部屋

イグレーヌとアグロヴァルがいる。

イグレーヌ

扉まで行って来た。扉は三つあった。気を付けるべきは、大きいもの……ほか二つは厚いものと、小さいもの。これらは開かない。ずっと昔に鍵はなくなった。門⁸は壁に封印されている。手伝って、扉を閉めるのを。街のものより重い……。そして硬い、雷も入ってこないだろう……。準備は十分？

アグロヴァル、戸口⁹に座りながら

杓摺¹⁰に座っている。膝に剣を抱いて……。前もこうしていた気がする、ここで待ち構え、見張る……。思い出しても、何の時だったか分からない……。何かをしたのか、いつだったのか……。あえて剣を抜くことはなかった……。今日はここにある、私の目の前。私の腕¹²に力はないが、やってみよう。守るべき時かもしれない。労が報われなかったとしても。

ベランジェールはタンタジールを胸に抱き、隣の部屋から出てくる。

ベランジェール

(彼は) 起きていた。

イグレーヌ

青ざめている……。何が？

ベランジェール

分からない……。 (タンタジールは) 静かに泣いていた……。

イグレーヌ

タンタジール。

ベランジェール

あっちを見ている。

イグレーヌ

私が分からない……。タンタジール、分かる？ (話しかけているのは) 私、あなたのお姉さん……。何を見ている？ こっちを向いて、ほら、一緒に遊ぼう。

タンタジール

違う……違う。

イグレーヌ

遊びたくないの？

タンタジール

歩けない、イグレーヌ姉さん……。

イグレーヌ

歩けない？ ……さて、ほら、気分はどう？ 少し深呼吸してみて？

タンタジール

うん。

イグレーヌ

どこが痛いのか？ 言って、タンタジール。治してあげる。

タンタジール

分からない（、イグレーヌ姉さん）、全部……。

イグレーヌ

来てここへ、タンタジール……。私の胸元が落ち着くでしょう、すぐに治る……。こっちに、ベランジェール……。私の膝の上に座らせて、渡して……。ほら、何か分かる……。？ お姉さんはここにいる……。あなたの周りに……。あなたを守る、悪いものが来ないように……。

タンタジール

分かるよ（、イグレーヌ姉さん）……。どうして、明かりがないの（、イグレーヌ姉さん）？

イグレーヌ

明るい、タンタジール。天井にあるランプが見えない？

タンタジール

うん、うん……。大きくない。他にはない？

イグレーヌ

どうして他が？ 十分に見える。

タンタジール

ああ！

イグレーヌ

おお！ 目に隈がある¹³！

タンタジール

あなたも（、イグレーヌ姉さん）……。

イグレーヌ

今朝はわからなかった……。隈はなかった¹⁴。魂が見たものは、私たちは正確には分からない。

タンタジール

魂なんて見なかった（、イグレーヌ姉さん）。どうしてアグロヴァルは、あそこ、入口にいるの？

イグレーヌ

少し休んでいる……。横になる前にあなたを抱こうとした……。あなたが目を覚ますのを待っていた……。

タンタジール

膝にあるのは？

イグレーヌ

膝？ 膝の上には何もない……。

タンタジール

ある、ある、何かが。

アグロヴァル

大したものじゃない、タンタジール。古い剣。ほとんど使えない……。長い間、私を守ってくれた。しかし最近は、信頼していない、もうダメになる……。ここ、柄の近くに、小さな染みがある……。鉄はさびてしまったし、考えていたんだ……。何を考えていただろう。私の魂は重い、今日は。

何かして欲しいことは？ ……不慮を慮りながら、過ぎさなければならぬ¹⁵。そして、それを望んでいる振りをしなくてはならない。とある夜、虚しい命が喉元までこみあげてくることがある¹⁶。[そんな時は、]目をつぶりたくなるものだ…
…¹⁷。

もう遅い。疲れた。

タンタジール

(アグロヴァルは) 傷を負っている (、イグレーヌ姉さん) 。

イグレーヌ

どこに？

タンタジール

額と手に。

アグロヴァル

これはとても古い傷で、もう痛みもない……。今夜は、明りが傷に落ちているのか。今まで傷が分からなかった？

タンタジール

悲しそう (、イグレーヌ姉さん) ……。

イグレーヌ

違う、違う、悲しいんじゃない、でもとても疲れている……。

タンタジール

姉さんも、悲しい。

イグレーヌ

いや、違う。違う。ほら、笑って。

タンタジール

ベランジェールも……。

イグレーヌ

そんなこと（ない）。笑っている。

タンタジール

笑っていない、わかる。

イグレーヌ

ほら、こっちへ、他のことを考えて……。

イグレーヌはタンタジールを抱く。

タンタジール

他のこと（、イグレーヌ姉さん）？ どうしていじわるするの、抱いているのに、
こうやって？

イグレーヌ

いじわる？

タンタジール

そう……なぜか、心臓を打つのが聞こえる（、イグレーヌ姉さん）……。

イグレーヌ

心臓を打つ？

タンタジール

おお！ おお！ 打っている、打っている、まるで……。

イグレーヌ

何？

タンタジール

分からない（、イグレーヌ姉さん）。

イグレーヌ

分からないことを不安がったり、謎かけで話をするべきではない。あら！ 目から涙が……。何に怯えている？ あなたの心臓も打っている……。こうして抱いていれば聞こえる……。[心臓の音は] 言葉では言わないことを話し、語るものだから……。

タンタジール

さっきは聞こえなかった。

イグレーヌ

その時は……。おお！ どうしたの、心臓が！ 破裂しそう！

タンタジール、叫ぶ

イグレーヌ姉さん！ イグレーヌ姉さん！

イグレーヌ

何？

タンタジール

聞こえた！ ……あの人たちが……あの人たちが来る！

イグレーヌ

誰？ 何が見える？

タンタジール

扉！ 扉！ あの人たちがそこに！

タンタジールは、イグレーヌの膝の上でひっくり返る。

イグレーヌ

何なの？ ……タンタジールが……気絶している……。

ベランジェール

気を付けて……気をつけて……（タンタジールが）落っこちそうだ……。

アグロヴァル、突然起き上がり、剣を持って
聞こえる……。廊下を歩いている。

イグレーヌ
おお！

沈黙。耳を立てる三人。

アグロヴァル
聞こえる……。何人かいる……。

イグレーヌ
何人か……どれくらい？

アグロヴァル
分からない……聞こえる、いや聞こえない……。普通の足音ではない。だが、近づいている。扉に触れた……。

イグレーヌ、強くタンタジールを胸に抱いて
タンタジール！ ……タンタジール！

ベランジェール、同じくタンタジールを抱いて
私も……！ 私も……！ タンタジール……！

アグロヴァル
扉を押している……。聞こえる、ゆっくりと。何か話している……。気配を感じる。

錠に鍵が差し込まれる音が聞こえる。

イグレーヌ

鍵を持っている！

アグロヴァル

そう……そうだ……分かった……待っている……。

アグロヴァルは立ち上がり、剣を高く持ち、二人の姉妹の後ろに立つて。

アグロヴァル

こっちへ！　こっちへ！

沈黙。扉が少し開く。アグロヴァルは動転しながらも、開こうとする扉を剣で押さえる。（戸の）縁の棧¹⁸の隙間に、剣先を突っ込む。開く扉の圧力に、激しい音と共に剣は折れた。破片は音を鳴らしながら、遠くへ飛び散った。イグレーヌは飛び上がり、タンタジールは気絶した。ベランジェールとアグロヴァルは力を込め扉を押し返そうとするが、無力である。音もなく、何も見えないが、扉はゆっくり開いてくる。部屋の中に、冷たく、穏やかな光が一筋差し込む。この時、タンタジールは、突然固くなり、正気を取り戻し、長い叫び声を発し、イグレーヌを抱いた。この叫び声と同時に、扉は、二人の力に抵抗することなく、突然一気に閉まった。

イグレーヌ

タンタジール！

全員、驚きながら、見合う。

アグロヴァル、扉に耳を傾けながら
何も聞こえない。

イグレーヌ、喜びに取り乱し

タンタジール！ タンタジール……！ 助かった！ 目を見て……。青い目が見える……。喋れる……。あの人たちは、私たちが見張っていると分かった。あえて入っては来なかった……。抱き合いましょう！ 抱き合って、ほら！ ……抱き合いましょう！ みんな！ みんな！ 心の底から！

四人全員、涙を浮かべながら、固く抱き合う。

第四場

部屋の前の廊下、第三場と同じ。

ベールを被った、三人の女王の使いが入って来る。

使い1、扉に耳を立てながら
まだ起きていない。

使い2
待つのは無駄だ。

使い3
女王は静かに行くことを望んでいる……。

使い1
眠っている時間だ……。

使い2
開けろ、早く……。

使い3
その時だ……。

使い1
待て、扉で。一人で行く。三人もいない……。

使い2
子どもは小さいからな。

使い3

姉に気を付けろ……。

使い3

女王は、彼女たちに知られることを望んでいない……。

使い1

恐れることはない、そう簡単にはばれない。

使い2

入れ、その時だ。

使い1は、扉を開ける、強引に。そして、部屋へ入る。

使い3

ああ……。

沈黙。使い1が部屋から出てくる。

使い2

どこだ？

使い1

(子どもは) 姉妹の間で眠っていた。子どもは姉妹に抱き着き、姉妹も子どもに抱き着いていた……。私一人ではできない。

使い2

行こう……。

使い3

分かった、やってくれ……。ここで見張っている……。

使い1

慎重に。彼らは何か知っている……。彼らは悪い夢と戦っている。

使い二人が部屋へ入る。

使い3

彼らはずっと知ってはいるが、分かっていない。

沈黙。使い二人は部屋から出てくる。

使い3

どうだ？

使い2

来てくれ……。ほどけない。

使い1

腕から離そうとしても、（彼女らは）子供を離さない……。

使い2

子供は、彼女らをととても強く抱いている。

使い1

子どもは寝ている、姉妹の胸に頭を乗せて……。

使い2

胸の上で、舟をこいでいる。

使い1

手を開くところまでたどり着けない……。

使い2

(手が) 姉の髪の毛に埋もれている。

使い1

小さな歯で金の髪の毛を噛んでいる。

使い2

毛を切るぞ。

使い1

姉妹の髪も、切ろう。

使い2

鋏はあるか？

使い3

ああ……。

使い1

早く、動き始めた。

使い2

胸と脛が同時に打っている……。

使い1

本当だ、姉の青い目が見える。

使い2

こちらを向いた、だが見えていない……。

使い1

一人に触れたら、二人が動いた。

使い2

耐えている、動いていないのに……。

使い1

姉が叫びだすぞ、だがもう少し……。

使い2

早く来るんだ、気づきそうだ……。

使い3

老人はいない？

使い1

いる、隅で寝ている……。

使い2

寝ている、剣の鞘の前で。

使い1

彼は気づいていない、夢も見していない。

使い3

こっちへ、こっちへ。終わらせる……。

使い1

彼らを引き離すのは骨が折れる。

使い2

本当だ、溺れたように絡み合っている。

使い3

こっちへ、こっちへ……。

使いは部屋へ入る。大きな静けさ。ため息と小さな寝言——苦悶に苦しみ寝ている——が聞こえる。そして、三人の使いは素早く暗い部屋から出てくる。うちの一人が、眠っているタンタジール——眠気と苦痛で小さなこわばった手をしている——を抱えている。その手には、姉妹の素朴で長い金髪が、溢れてい

る¹⁹。三人は静かに逃げる、廊下の端にたどり着くと、タンタジールが急に眼覚め、苦痛極まった大きな叫びをあげる。

タンタジール 廊下の端で
ああ！

再び静かになる。そして、隣の部屋から二人の姉妹が起きる音が聞こえる。

イグレーヌ、部屋の中で
タンタジール！ どこへ？

ベランジェール
ここにはいない。

イグレーヌ、次第に強くなるうめき声と共に
タンタジール！ ランプ！ ランプ！ 灯を付けて！

ベランジェール
分かった……。分かった……。

イグレーヌ
見える、これ、扉が空いている、部屋から出て行った、手に灯を持っている。扉が開いている！

タンタジール（の声）、遠くてほとんど区別がつかない
イグレーヌ姉さん！

イグレーヌ

叫んでいる……！ 叫んでいる……！ タンタジール！ タンタジール……！

イグレーヌは廊下を走っていく。ベランジェールがついていく。しかし、沓摺に気づかず、転んでしまう。

第五場

大きな鉄の扉、とても暗い天井。

イグレーヌが入ってくる、髪は乱れ、手にランプを持っている。

イグレーヌ、錯乱しながら振りかえる

来ない……ベランジェール……！ ベランジェール……！ アグロヴァル……！ どこ？ タンタジールを愛していると言ったのに、私を一人にした……！ タンタジール……！ タンタジール……！

おお！ そう、登った、少しずつ登った、高い壁に挟まれた数えきれない階段を、慰めもなく、心臓はもう耐えられない……。天井が動く聞いたことがある……。

（イグレーヌは、天井を支える柱にもたれかかる。）

転びそうだ。おお！ おお！ 惨めな命！ そう感じる……。私の命は喉元まで上がってきて、すぐに出ていきそうだ……²⁰。自分が何をしたのかを分かっている……。何も見ていない、何も聞いていない……。静かだ……！

金の髪の毛を見つけた。長い道のり、大きな壁に。私は追った。それを集めた。おお！ おお！ なんてキレイなんだ！ 小さな坊や²¹……。小さな坊や……。なんと私は言った？ 思い出そう……。何も分からない……。眠ろうか……。全て無意味だ、ありえない……。自分が何を考えているのかも分からない……。女王を覚ました、そして……。さらに、見て、深く、よく考えなければ……。あれこれ言われても、結局、心は全然違う道へ行ってしまう。荒れ狂った時のことなんて、誰にも分からない。私はここへやってきた、小さなランプを持って。階段の風にも関わらず、灯は消えていない……。心の中で、何を考えているのだろう。分からないことが多すぎる。それでも、知っている者もいるに違いない。だが、なぜあの人たちは話さないのか？ （周りを見渡ししながら）こんなところ見たこともない……。これ以上、上へはいけない。全てが守られている……。寒い。とても暗い、息をするのも恐ろしい。闇が満ちていると人は言った……。おぞましい扉がここに……。（イグレーヌは扉に近づき、触れる。）おお！ 冷たい……！ 鉄でできていて、平坦、全く平坦で、鍵もない……。どこから開ける？

丁番がない……。壁に埋まっている……。これ以上、上へはいけない……。段もない…。(恐ろしい叫び声が聞こえる。) ああ……。扉に、金の髪の毛がはさまっている！ タンタジール！ タンタジール……。さっき、扉が閉まった音が聞こえた……。思い出した！ 思い出した……。行かなくては……。(イグレーヌは狂乱して拳と足で扉をたたく。) おお！ 怪物！ 鬼！ ここにいるんだ！ 聞いて！ 呪ってやる²²！ 呪ってやる！ つばを吐いてやる！

扉の反対側で小さく叩く音が聞こえる。とても弱いタンタジールの声が聞こえる、鉄の扉越しに。

タンタジール

イグレーヌ姉さん、イグレーヌ姉さん。

イグレーヌ

タンタジール！ なに、なに？ タンタジール、あなた……？

タンタジール

早く開けて、早く開けて。女王がここに……！

イグレーヌ

おお！ おお…！ 誰……？ タンタジール、可愛いタンタジール……。聞こえる……？ そこにいる？ 何があった？ タンタジール……。悪いことをされた？ どこにいる……？ そこにいるの？

タンタジール

イグレーヌ姉さん、イグレーヌ姉さん……！（扉を）開けてくれないと、死んでしまう。

イグレーヌ

待って、やってみる、待って……。開けてる、開けてる……。

タンタジール

違う、イグレーヌ姉さん！ 時間がない！ 女王は私を止められなかった……。
（扉を）叩いてる、叩いてる……。早く、早く、女王が来る……！

イグレーヌ

行く、行く……。女王は……？

タンタジール

見えない、音が聞こえる、おお！ 怖い、イグレーヌ姉さん、怖い！
早く、早く！ 開けて、早く！ 神の愛のために²³！ イグレーヌ姉さん！

イグレーヌ、不安そうに扉を触って

必ず見つける……。少し待って……。もう少し……。もうちょっと……。

タンタジール

できない、イグレーヌ姉さん……。後ろで女王が息をしている。

イグレーヌ

違う、タンタジール、可愛いタンタジール、怖がることはない……。私には見えない……。

タンタジール

私には見える、明かりが見える……。あなたの近くを照らして、イグレーヌ姉さん……。ここからだ、見えない……。

イグレーヌ

私が見える、タンタジール？ どこが見える？ 隙間はない……。

タンタジール

いや、ある、ひとつ、でもすごく小さい……！

イグレーヌ

どこ？ ここ？ 言って、言って……。ここ？

タンタジール

ここ、ここ……。聞こえない？ 叩いている。

イグレーヌ

ここ？

タンタジール

もっと上。でも、とても小さい……！ 針すら通らない……！

イグレーヌ

怖がらないで、私はここ。

タンタジール

おお！ 聞こえる、イグレーヌ姉さん……！ 引っ張って！ 引っ張って！
女王が来る……！ 少しでも開けてくれたら……ほんの少し、僕は小さいから
……！

イグレーヌ

爪がない、タンタジール……。引っ張ってる、押してる、叩いてる……！ 叩い
ている……！（イグレーヌはまだ叩いている、動かない扉を揺らそうと働き
かけている。）指二本が、もう動かない……。泣かないで……。これは鉄だ……。

タンタジール、絶望的に苦しんでいる

何か開けるものはないの（、イグレーヌ姉さん）？ 何もない、何も……。
ここを抜けられたら……。私は小さい、とても小さい、知っているでしょう……。

イグレーヌ

ランプしかない、タンタジール……。ほら！ ほら！（イグレーヌは土粘土ラ
ンプを使って扉を強く叩いている、土粘土ランプは消えて、壊れる。）おお…
…！ 急に暗くなった……！ タンタジール、どこにいる！ おお！ 聞いて、
聞いて……！ 中からは開けられない……？

タンタジール

開かない、開かない、何もない……。何も分からない……。隙間の明りも見えな
い……。

イグレーヌ

何があった、タンタジール……？ ほとんど聞こえない。

タンタジール

(イグレーヌ姉さん、) ありえない……。

イグレーヌ

なに、タンタジール……？ どこへ行くの……？

タンタジール

女王が……！ もうダメだ。イグレーヌ姉さん、イグレーヌ姉さん……！ 感じる……！

イグレーヌ

誰……？ 誰？

タンタジール

分からない……見えない……。ありえない……！ 女王が……女王が喉元に……。女王の手が喉元に……。おお！ おお！ イグレーヌ姉さん、来て……。

イグレーヌ

うん、うん。

タンタジール

暗くなった！

イグレーヌ

もがいて、守って、裂いて……！ 怖がらないで……。もう少し……！ ここにいる……。タンタジール？ タンタジール！ 何か言って……！ 助けて！
どこにいるの……？ 助けに行く。扉の奥に。キスをして²⁴。ここ……ここ……。

タンタジール、とても弱く
ここ、ここ（、イグレーヌ姉さん）。

イグレーヌ
ここ、ここ、キスをしてる²⁵、聞こえる？ もう一度！ もう一度……！

タンタジール 段々と弱くなって
私もしている……。ここ、イグレーヌ姉さん……。イグレーヌ姉さん！ おお
……！

鉄の扉の奥で、小さな体が崩れる音が聞こえる。

イグレーヌ
タンタジール！ タンタジール……。どうしたの……。戻って！
戻って！ 神の愛のために、戻って……。何も聞こえない……。何をしているの？ あの子に悪さしてるの？ 可愛そうな子！ 耐えられなかった……。見て、見て……。悪いことはしません……。膝をついている……。帰ってきて、お願い！ 私のためじゃない、分かるでしょう……。望むものは全てやる……。私はバカじゃない、ほら……。手を合わせてお願いします……。
苦しい……。もう諦める、見えるでしょう。全て失った……。[全て失ったので私を]これ以上罰する方法はない……。²⁶ 苦しいことなんて、いくらでもある……。苦しめたいのなら……。分かるでしょう……。この子は何もしていない……。私が言ったのは、本当じゃない。でも、知らなかった。知っている、あなたは良い人……。最後は許してくれるのでしょうか！ あの子はとても若い、かわいくて、とても小さい……。分かるでしょう、ありえない！ 小さな腕が、あなたの首に抱き着いている。小さな口が、あなたの口に。神だって、耐えられない……。開けてくれる、のでしょうか……？

何も要求していない……。少しでも時間があれば、ちょっとした間……。思い出せない……。分かるでしょう……。時間がなかった……。ほんの少しで通り抜けられた……。²⁷。難しいことじゃない……。(逃れられない長い静けさ。) 怪物！
鬼！ つばを吐いてやる……！

イグレーヌは崩れ落ち、静かに苦しみ続ける、扉に胸を広げている、暗闇の中で。

- 1 「這いつくばって生きてきた Ma sœur et moi, nous nous traînons !」
- 2 「みんなが望むこと全てが分かる je comprends tout ce que l'on veut」
- 3 「日中、山は青い……Les monts sont bleus durant le jour…」
- 4 「私の心の中に、何があるのか分からない Je ne sais ce qu'il y a dans mon cœur…」
- 5 直訳すると「彼の小さな魂 sa petite âme」
- 6 「でも、私は女王を驚かせようと思う mais je l'étonnerai」
- 7 「手を広げようとするものはいない pas un n'ose étendre le bras」
- 8 「鉄の棒 les barres de fer」
- 9 「境界 seuil」ここでは、廊下と部屋の境界なので、戸口。
- 10 「境界の踏面の上 sur les marches du seuil」
- 11 「思い出す全てのことが分からないところの時というものがある il y a des moments où l'on ne comprend pas tout ce qu'on se rappelle」ここでは、アグロヴァルがかつて行った行為については憶えているが、何のために、どういう場面であったかを忘れたという文脈で話をしている。
- 12 「胸 les bras」
- 13 「深い profonds」に対して「隈」の訳語を充てた。原文は「おお！ あなたの眼は深い！ Oh! tes yeux sont profonds!」だが、前後の文意を考えるとタンタジュールとイグレーヌの不安と疲労を表す表現であるとみなした。
- 14 この一文の意味は不明である。原文は「上がっていくのを見た J'ai vu monter」だが、指示語がなく、前後の意味を考えても不明瞭である。倉知識でも「何かが浮かんでくるのが見えた。」と、前後の文意からすると不明な一文である。従って、前後の文意をくみ取って訳した。
- 15 「予期せぬ事態に備えながら過ごさなければならない Il faut bien que l'on vive en attendant l'inattendu」
- 16 「喉元に無駄な人生が登って来るような夜更けがある On a de ces soirs graves où la vie inutile vous remonte à la gorge」
- 17 原文に「そんな時は」という節はないが、セミコロン（;）によって前の文章と構文的につながっているので、日本語で補足した。
- 18 「縁の梁の間 entre les poutres du chambranle」

- 19 「姉妹の髪の毛に、素朴な金の長い巻毛の輝きが、あますところなくあふれている *l'inondent tout entière du ruissellement des longues boucles d'or ravies aux chevelures des deux sœurs*」
- 20 「命は唇の端まででかかり、飛び出そうとしている *Elle est tout au bord de mes lèvres et elle veut s'en aller...*」
- 21 フランス語は「おやゆびこぞう *Petit Poucet*」で、シャルル・ペローの有名な童話の登場人物。
- 22 フランス語「*blasphémer*」は、「冒瀆する」「侮辱する」「ののしる」の意味がある。
- 23 「良き神の愛のために *pour l'amour du bon Dieu*」
- 24 フランス語「*embrasser*」は、挨拶で使う「接吻」「抱擁」「頬にする軽いキス」のこと。
- 25 ここでは「接吻をする *je donne des baisers*」だが、前の「*embrasser*」を受けている。扉にキスをして少しでも近くにお互いの存在を感じようとしている。
- 26 「他の方法で私を罰するしかない *Il faudrait me punir autrement*」
- 27 「通り抜けるためには、ほとんど何も必要なかった *Il ne faut presque rien pour qu'il passe*」